
最後の竜騎士

ゆずはらしの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の竜騎士

【Nコード】

N6629N

【作者名】

ゆずはらしの

【あらすじ】

ドナの村の子どもイルは、遠くの村に嫁ぐ姉メルの花嫁の飾りを作ろうと、水晶花のかけらを探してパロミの山に登った。そこで竜と竜騎士の伝承を知る、巡礼の男に出会う。

登場人物、その他設定（前書き）

人物が増えてきて、言語についてもいろいろあるので、まとめてみました。

読まなくても、内容はわかります。

登場人物、その他設定

登場人物 その他設定

この世界では、誰でも最初は、性別を持たない者として生まれる。ある程度の年齢になると変化して性別を選ぶ。

性別は一生のうち、何度か選ぶ機会があるが、必要な薬草などがあり、それらは高価なため、貧しい者は何度も選べない。また、あまりにも性別を変える者は、『誠意を持たない』『心の浮ついた』者として、悪く言われる。どのように性別を変化させたかは、名前の後につく『マー』や『コー』の音でわかる（例／ザイ・マ・コ…：最初に女性に変化して子を産み、次に男性に変化して子をなした者ザイ）。

家系は、女性の血筋で判断される事が多い。この世界では女性体の方が、力が強く、背も高い。労働力として役立てるため、最初の性別は、女性を選ぶことが一般的。

最初から男性体を選ぶのは、裕福な一族の者のみ。

イル

ドナの村のラッタ（家を持たない群れの子ども）。成人前で、まだ性別が別れていない。村長カン・マの十六番目の子。父親は四番目の夫ハイ・コ。既に病没しており、後ろ楯はない。ほったらかしの状態で育った。

五つ年上のメルに育ててもらった。

メル・ムー

カン・マの二番目の夫、ザイ・マ・コの血筋の子どもで、二年前に成人し、女性体になった。カン・マの血筋ではない。ザイ・マ・コにとっては孫にあたる。

元々はビラウ（家つきの子ども）だったが、両親を失い、カン・マの夫たちの嫌がらせでラッタの群れに入れられた。ラッタの群れでは、イルの面倒を見ていた。遠く離れたハイ口の村から婚姻の申し入れをされ、婚儀を上げる予定。

カン・マ

ドナの村長。厳しい表情の女性。優れた長と呼ばれる。

ソル・コ

カン・マの第一の夫。古い血筋の者で、姿形も美しく、敬意を払われてはいるが、愛情は得られなかった。

ザイ・マ・コ

カン・マの第二の夫。若いころは、近隣に鳴り響く美貌の持ち主だった。一度女性化した後、男性化してカン・マと婚姻を結んだ。現在もカン・マからの寵愛を受けている。

ラニ・ムー

ソル・コの血筋の娘。イルの姉。気位が高く、弱い者に容赦がない。ケナ・ムーへの対抗心から、メルやイルをひどくいじめる。

ケナ・ムー

カン・マの後継者。女性体。第二の夫ザイ・マ・コの血筋の子ども。イルに対して関心はないが、メルの関係で顔見知り。ラニ・ムーに恨まれている。

ザイ・マ・コは貧しい家出身で、後ろ楯を持たなかったため、立

場はずっと微妙だった。

ジョー・マ・コ

カン・マの祖母。ドナの村の最年長者。

ギレ・ク、アレ・マ、テマ・コ、サリ・ク。

ソル・コの取り巻き。

用語説明

ラッタ

家を持たない子どもの群れ。『汚い小動物』という意味合いがある。後継者以外の子どもは、産み捨てのような状態で、群れで育つ。とは言え誰の子どもなのか、わからないわけではない。村によつて扱いは変わるが、大体どこでも、食事や古着などを裕福な者から恵んでもらい、下働きのような事をしながら育つ。

ビラウ

家付きの子どもや、後継者を意味する言葉。元々はこちらが『子ども』という意味だったが、身分の区分ができるにつれ、『血筋がわかつている、家で育てられている子ども』に対して使われるようになった。

ロハイ

太陽神。名を呼ぶ時には必ず、ダル・コー（大いなる父）の尊称がつく。男性。美しい面と子を与える力、恵みをもたらす優しさを持つとされる。

リーア

大地の女神。名を呼ぶ時には必ず、ケン・マー（麗しき母）、カツハ・マー（強き母）、カツハ・マルー（猛々しき戦士）の尊称がつく。女性。猛々しい戦士であり、命を与え、また奪う者とされる。

アーベ

太陽の神の長男。天空の御子。アーベ・ク

イー・オ・ウイカ

大地（古語）

ウ・ウエレ

恵み。アーベの子である精霊。アーベと同一視されることもある。

エン、クエン

麗しき

エンビダ

麗しきわが盾。恋人や夫婦の、男性から女性に対する呼びかけ。

カツハ

強い、猛々しい

ク

男、兄弟

コー

父親

ダ・クタラ

神々、力強い精霊たち

ダル

大いなる

チャミ

かわいい人。恋人や連れ合いのほか、妹や、自分の子どもにも使われる。恋人や連れ合いの場合は、女性から男性に対して使われることが多い。男性から女性に対しては、エンビダが多く使われる。ビルト

守り。ベダの娘である精霊。ベダと同一視されることもある。

ベダ

大地の娘 ベダ・ムー

ムー

母親、子を産んだ女

ムー

姉、姉妹、娘

ム、マ

女

マルー

戦士

ローハ

太陽

リーア・カ

大地

1・水晶花のかげら（前書き）

2009年度クリスマスギフト企画に出しそびれた作品。童話のよ
うな雰囲気のスFを目指しました。ややフライング気味ですが、時
間のある時に投稿しておこうと思い、第一話を上げました。四万字
程度の中編になる予定です。

1・水晶花のかけら

その男は、千年を生きたかのような眼差しを持っていた。

* * *

パロミの山は、竜と竜騎士が最初に降り立った場所だと言われている。はるか昔、人間がこの世界にようやく現れ出した頃。この地には多くの魔物がいた。そうした妖魔たちと戦ってこの地を平和に導いた、半神半人の戦士たち。

ドナの村は山の側にあつて、村人はいつも山を見上げていた。

「悪さをする、竜が山から降りて来て、頭から食べてしまうぞ」

この言葉は、村人が子どもを脅したり、臆けたりする時に良く使われた。

小さな子どもは怯える。しかし、やがて馬鹿にするようになる。大人になると、そんなものはいない、いるはずがないと言うようになる。

竜も、竜騎士も。とうの昔に、物語の中の存在になってしまっているのだ。

イルは山に登ると、水晶花のかけらを探した。もつれた灰色の髪が、うっとおしい。見上げた空では、太陽が傾き始めている。痩せこけた体につきだらけの服、奇妙な形に歪んだ、くすんだシヨール。褐色の肌は泥で汚れている。黄褐色のイルの目は、光を浴びて金色

になった。夏の季が終わってから、日は次第に短くなってきている。それほど長くはいられないだろう。

イルはドナの村の子ども一人だ。一括りに『ラッタ』と呼ばれる子どもたちは、みな、村の子どもだった。ラッタは年寄りによって適当な年令まで養育される。とは言え、誰の子どもなのか、わからないわけではない。イルは村長カン・マの十六番目の子どもだった。

十六人も子どもがいれば、長の子ともいえず、何の期待もされない。しかもイルの父親は四番目の夫で、後ろ楯はないに等しかった。父親であるハイ・コは愛情深い人物ではあったが、数年前に死んでしまい、ぼんやりとした面影ぐらいしか覚えていない。生きていれば、彼がイルを養育したのだろうが。そうして母親であるはずのカン・マは、母と言うより村長としてしか認識できていなかった。イルはほったらかしの状態で育った。イルにとつての家族はラッタの群れの仲間たち、そうして母親ママと言えるのは、自分の面倒を見てくれた、五つ年上のメルだった。

メルはカン・マの二番目の夫、ザイ・マ・コの血筋の子ともで、二年前に成人し、娘になった。艶やかな褐色の肌、柔らかく渦を巻く白髪に、優しい黄褐色の瞳。娘に変化した途端、彼女はその美しさで評判になり、近隣の村々から、婚約の申し込みが殺到した。

そのメルが、次の花満はなみつの月に、婚姻の灯をともし、神々ダ・クタと精霊たちの前で約束の花綱を結ぶ。

「メル姉アの為に、一番綺麗な飾りを作るんだから」

イルはつぶやいた。婚姻の相手は、ハイ口の村の若者。ロダから遠く離れた村だ。長女を失ったその村の古い血筋の女が、名を継ぐ者として、自分の息子の相手にメルを指名した。次代の家長として迎えたいと。メルはその美しさから、男性に変化したなら、見栄えの良い夫になるだろうと言われていた。娘として二、三年暮らし、

それなりの持参金を自分で稼いだ後は、どこかの富裕な女の二番目か三番目の夫に指名されるだろうと思われていたのだ。事実、婚約の申し出は、ほとんどがそのようなものだった。イルと同じく後ろ盾のないメルには、そうした道しかないと思われていた。

そこに降ってわいたかのような、婚姻の申し込み。

これはメルにはとてつもない幸運で、大した出世と言えた。この話を聞いた時、イルは彼女の為に喜んだ。容色を見込まれただけの夫の立場では、容色が衰えれば、捨てられても文句は言えない。自分の父親がそうだったように。けれど、次代家長として迎えられないのであれば、尊重され、大切に扱われるはずだからだ。

だが、ハイロの村は遠い……。

別れば、もう会えないかもしれない。だからこそ、後悔のないように、自分のできる事で、精一杯祝ってあげたい。

婚姻の花綱を結ぶ花嫁が身につける額飾りは、美しいものでなければならぬ。強き母^{カッハ・マー}たる大地の女神（「リーア」）は、戦に臨む時には常に、美しく装った。美しいものは、魔物を遠ざける。青く光る水晶花は、きっと素晴らしい飾りになるだろう。この季節に見つけるのは難しいかもしれないが、メルの為だ。誰よりも美しい飾りを作りたい。そう思ってたの事だった。

「どうしたの、あんた。怪我？」

水晶花が見つからず、結構上の方まで登ってしまった。薄い空気にふうふう言っていると、石積みのある場所に、男が一人、座り込んでいることに気がついた。

よそ者だ。

着ているものは、ぼろぼろだった。無骨な杖が側に転がっている。近づくと、男の肌の色が薄い事に気がついた。逆に髪は濃い色をし

ていて黒い。イルもそうだが、この辺りの村人は、大抵が褐色の肌に白や薄黄色の髪をしていた。こんな色の髪や肌を、イルは見た事がなかった。

見た瞬間、ぎょつとして立ちすくんだ。けれど、男があまりにも静かにしているので、不安になった。ひどい怪我でもしているのだろうか？

男はおつくうそうに、目を上げた。その目の色が青く見えて、イルはまばたいた。あり得ない！

羽虫が羽ばたくような小さな音が聞こえた。それから男は、低い声で言った。

「大事ない」

イルはまばたいた。

「何言ってるのよ。おばあちゃんが具合悪い時みたいに、くたびれてるわよ、あんた」

まだ少し怖かったが、相手の様子が気になってそう言った。

「蜜が少しあるの。甘トランプット花のよ。食べたら元気になるわ。あげようか？」

「いや……」

「あげるわ。ほら、食べて！」

強引に差し出すと、男はイルを珍しげに眺めた。

「麓の村の者は、よそ者を嫌う。ちがったか」

「なにそれ」

「村人以外の者と、炉の火を分け合う事はない。それがこの辺りの、

土に根付いた村人のありがたさ。それとも変わったのか」

イルは顔をしかめた。

「死にそんな人を放っておくような罰当たりはいないわ。それに、じきに祝い事があるのよ。花嫁が嫁ぐ前に、不吉な事は嫌じゃない」
「俺は不吉か」

「死なれると不吉なの！ 見てしまったあたしが、穢れになるじゃないの。清めに時間がかかったら、水晶花を見つけても、メルに渡せなくなっちゃう」

男は小さく笑った。

「水晶花。花嫁の飾りか……まだ、続いているのか、その風習は」
「まだって、なによ。当り前でしょ、花嫁に飾りを贈るのは」
「そうか。そうだな。当り前なのだろう」

男はつぶやくように言うと、こちらを見た。

「受け取ろう。パールオ・ミスの娘」
「なに言ってるの？ あたしはロダの子^{ラッタ}どもよ。女^{マイ}になる予定だけれど、娘^{ムス}と呼ばれる歳じゃないわ」
「ロダはパールオ・ミスの血を継ぐ村だ。おまえが知らないだけだよ。娘と呼んだのは……詫^{ワタ}びよう」

そう言うと、男は手を差し伸べた。イルは何となく言い負かされたような気分になったが、男のぼろぼろの姿に言葉を飲み込んで、花の蜜を手渡した。琥珀色をした貴重で小さな塊を手にすると、男はしげしげと見つめた。

「どうしたの。食べられない？」

「いや。考えていた。これに似た、水晶花のかけらを持っている娘はいないか」

イルは目をぱちくりとした。

「馬鹿ね、水晶花の色は青か白よ。黄色いかけらなんて、聞いた事もないわ」

「昔、おまえの村の娘が持っていた。誰かに譲ったかと思ったのだが」

「そうなの？ 知らないわ。なんて名前の人？」

「ウジョル」

イルは眉をひそめた。

「古い名前ね。今の流行りの名前じゃないわ」

「そうか」

「ひいおばあちゃんなら、何か知ってるかな」

男は一瞬、動きを止めた。ぎくりとしたその動きは、ひどくぎこちなく見えた。

「曾祖母がいるのか」

「あたしの家系は長生きなのよ。カン・マの祖母にしてリユー・マの母、ジョー・マ・コは特に長く生きているの。いつもは眠ってばかりだけど、時々起きて、古い話をしてくれるわ」

「ジョー・マ・コ」

「知らない？ この辺りで一番の長生きよ。いくつになるのか、誰も知らないくらい」

「ジョル、マ・コ」

そう言うと、男は目を閉じた。

「連れ合いの名はわかるか」

「ひいおばあちゃんのか？ 確か、最後の妻がミユルで、……」

「最初の夫は」

「エ、……エレ、だったかな。エム？ 確かそんな名前」

「エムル」

「あ、そう！ エムル！ エムル・コ！ ひいおじいちゃんの名前から、二番目の兄さんの名前もらったって……って、なんであんたが知ってるの」

「何となく」

「そう？」

うさん臭そうな顔をしたが、イルはそれ以上の追求を避けた。

「とにかく、義務は果たしたからね。それ食べて、元気になったらどこか、もう少し過ぎやすい場所に移動して。ここは夜には冷え込むわよ」

「ああ」

男は指先で蜜の塊をつまむと、それを口にした。

「それじゃ」

見届けて、立ち上がろうとしたイルに、「待て」と声をかける。

「この時期に水晶花を見つけるのは、むずかしいのではないか。あれは夏の季の花だ」

「知ってるわ。でも、見つける。メルには必要なの」

「そうか」

男は小さく息をつくと、おっくうそうに首を振った。

「その道を、太陽の昇る方へ行け。一つか二つ、咲いているのを見た」

軽く顎をしゃくる。イルはまばたいてから、笑顔になった。

「ほんと！ ありがとう。行ってみる！」

「気をつけて行け」

「うん、ありがとう、ほんとに！ あんたにアーベ・クとベダ・ムーの恵みがあるように！」

「アーベとベダ」

つぶやくように言うと、男は目を閉じた。

「天空の子と大地の娘、だったか」

「そうよ。アーベ・クは天空の御子。空に輝き、全ての命に熱を与える太陽^{ローハ}を運ぶ、大いなる父ロハイの息子。ベダ・ムーは大地の娘^{ダル・コー}。横たわり、息子や娘を産みだす麗しき母^{ケン・マー}にして猛々^{カッハ・マル}しき戦士リーアの娘よ。知ってるでしょう？」

「知っている……知っていた」

男は目を閉じたまま答えた。

「二人と、そして二人から生まれた子どもたちは地を巡り、平和をもたらした」

「竜騎士の話？」

「最初の竜と竜騎士は、その二人だったからな」

イルは男の話し方が、なぜか気になった。

「見てきたように話すのね。あんた、そんなに年寄りなの？」

「年寄りは年寄りだろう。おまえと比べれば」

「あたしはイルよ。おまえじゃないわ」

そうか、とだけ男は答えた。

「ねえ。名乗ったんだから、あんたも名乗りなさいよ」

男はしばらく答えなかった。苛立ったイルが何か言おうとした時、静かに口を開いた。

「エイワン」

「ワン？」

「エイワン」

「レ……エワン？」

「エイワン。言いくければ、レワンでも良い」

「レワン・ク？」

「いや。エイワン。それだけだ」

「それだけ……？ 変な名前」

「そうか」

「男が女が良くわからないじゃない。男なら「ク」の音が入るし、女なら「ム」の音が入るものでしょ。あたしだって、男になるならイル・クになるし、女になるならイル・ムになるのよ。それで子どもが出来たら、「オ」か「ア」の音をもらうの。」

メルは女になるのが決まっているから、メル・ムーになるけど。うちの村、古い血筋以外は、一番目はだいたい男になるけど。それ以外はみんな最初、女になるから」

「そうか」

小さく笑うと男は言った。

「俺を「コ」の音をつけて呼びたいと、言ってくれた者は、もういないのだ、パールオ・ミスの子ども。はるかな昔にはいたのだから俺は、ただのエイワンだ。それだけの話だ。

もう行くが良い。日が暮れるのは早いぞ」

男は「子ども」という表現に、村の者が使う「汚らしい餓鬼んちよ」の意味の「ラッタ」ではなく、跡取りである長男や長女にしか使われない、「愛される子ども」の意味の「ビラウ」を使った。メル以外にそんな言葉で呼びかけられた事のなかったイルは、びつくりして息を飲んだ。そうして男を見て、風雨に晒され、厳しく、どこか超然となつてしまっている顔の奥に、歳月の重みと、悲しみのようなものがある事に気がついた。

疲れ果てている顔だ。

それでいて、声音には優しさがある。

男の目は、ここではないどこか遠くを見ているかのようだった。自分を見ているようで、見ていない。「コ」の音をつけて呼びたいというのは、結婚して夫となり、自分の子どもの父親となつて欲しいという申し出だ。そういう相手が、この男にはいたのだ。

もういない、というのは。相手に死なれたのだろうか。

巡礼者、の一言が頭に浮かんだ。番いの相手に死なれた者の中で、たまに新しい相手を見つける事をせず、放浪の旅に出る者がいる。彼らは思い出の中に生き、聖地と呼ばれる場所を巡り、やがて旅の中で果てる。炉端語りに聞いた事がある。

この男は、その巡礼者なのだろうか。

「ね、あんた巡礼者？ 聖地を巡る旅をしているの？」

イルは声音を和らげて、恐る恐るという風に尋ねた。男はまばたいて、イルを見つめた。

「聖地」

「この山は、竜騎士の聖地でしょ。もう言い伝えぐらいしかないけど」

「聖地……ああ。そうだな。巡っている。竜と、竜騎士の遺した足跡を」

小さく息をついて男が言つと、どこかで妙な音がした。羽虫が飛ぶような音。

「ねえ。それならやつぱり、うちの村においでよ。巡礼者なら大丈夫。旅の話は誰でも聞きたいもの」

随分と、この男はくたびれている。不意にそう思い当たって、イルは言った。男はしかし、首を振った。

「いや。俺はここにいたいのだ……イル」

名前を呼ばれ、イルはどきりとした。

「知っているか。ここは、最初の竜騎士が降り立った場所。最初の竜が眠った地でもある。この石積みは」

男は片手を上げると、もたれている石積みに触れた。

「彼らの記憶を伝えるものだ」

イルの目には、それは崩れかけた、薄汚れた石積みにはしか見えなかった。

また、微かにぶんぶんという音がした。何の音だろう。

「意地っ張りね」

「そうだな」

「良いわ。あたし、もう行く。でも、村の人には伝えておくから。何かあったらすぐ村に来るのよ。レワン・ク」

あえて「ク」の音を入れたイルを見て、男は微かに笑った。

「アーベとベダの守りが、ここにはある」

「そう」

「だが、感謝する。イル。ジョル・マ・コとエムル・コの血を継ぐ者。パールオ・ミスの子ども^{ヒラウ}」

「大切な子ども、なんて呼ばれるような大層な者じゃないのよ、あたし。でもありがとう。レワン……エ、エーイ、ワン・ク。恵みと守りがあなたと共にあるように」

自分を尊重してくれた男に何か返したくて、イルはできる限り、男の発音に似せて彼の名を呼んだ。うまく言えない。舌がひっかかる。でも何となく、そうしたかった。それから正式な作法で礼を取った。男の目が小さくきらめき、楽しげに笑うのが見えた。

小さな姿が駆け去るのを見送ってから、男は目を閉じた。

エーイ・ワン

褐色の肌に白い髪、黄色い目のこども。この辺りの村人に共通す

る色彩。ひどく痩せていてちっぽけで、生きるのに精一杯な姿に見えた。けれどその中にあるたくましい生命力が、その瞳の中にはきらめいていた。

エーイ・ワン

懐かしく聞こえた発音。エーイ、という音は、ウェイや、レイとも聞こえた。発音しにくかったのだろう。

エーイ・ワン……。

エイワン。

まるで違っているのに、なぜか、記憶の中の呼びかけに重なった。思えば長く、人から名を呼ばれた事がなかった。

エイワン。

エイワン。

われらが誇り。アベルの第一の息子よ。

父たるアベル。彼から生まれた者としての名。母たるベルティアは、愛情深かった。区別をつける為だけの名前を、まるで愛称のように優しく呼んだ。エイワン。まるで贖罪のように。

ああ、だが。俺たちにとってその名は、誇りだったのだ、ベルティア。

* * *

巡礼の男が言った通り、進んだ先に水晶花が咲いていた。花が三

つついていて、風に揺られ、ちりちりと音を立てている。イルはそっと手を伸ばすと、繊細な花びらが崩れないように注意しながら、花をつんだ。

「良かった……少ないけど、でもこの時期の水晶花だもの。メルも喜んでくれるわ」

見つかって良かった。姉と呼ぶ存在の幸せを祈ると、その思いをこれで形にできる。

「メルが幸せになるように。長く生きて、多くの子どもに囲まれるように」

そつとつぶやくと、イルは持ってきた籠に水晶花を入れた。

「エーイ・ワン」

戻ると、石積みの所に男はまだいて、目を閉じていた。

「戻ったのか……」

「ありがとう、見つけたわ。これであたしの姉に飾りを作⁴ってあげられる」

「そうか」

小さく羽虫の音がした。イルは周囲を見回した。

「どこにいるのかしら」

「なにがだ」

「虫よ。さつきから……あんたの側に来ると、ぶんぶん、小さい音がするの」

男はまた、独特のぎくり、とした動きで体を止めた。

「そうか。虫か」

「今の時期に、こんな高い所で虫が飛んでた事なんてないのに」

「そんな事も、あるだろうさ」

つぶやくように言うと、男はイルに目を向けた。

「日はすぐに落ちるぞ。降りて村に戻れ」

「あんたはどうするの……エーイ・ワン」

「俺はここにいる」

イルはどうしようかという顔をした。こんな場所で一人でいたら、あつと言う間に獣にやられる。それに、まだ夏の季が終わっていないとは言え、夜は冷える。山の上では。

「さつきも言っただけど、うちに来ない？ 巡礼者だって、長にあたしが言っただけあげるわ。こんな所で夜を明かしたら、朝にはあんた死んでるわよ」

「大丈夫だ」

男はしかし、そう言った。イルは何か言いたげな顔になったが、あきらめて息をついた。

「あたしより旅なれてるものね。でも、危ないと思ったら村に来るのよ。長には言っておく。良いわね？」

それから自分の持ち物を点検して、肩にかけていたひどく不格好なショールを外し、男の肩にかけた。

「これは……？」

「文句言わないでよ。あたしには宝物なんだから。何年もかけてやっと完成させたわ。四番目の夫の子どもで、しかも十六人目だったから、食べ物も服も、自力で何とかしないとイケないのよ。これは、野原に落ちてたゴル羊の毛を少しずつ集めて、紡いだ毛糸で編んだの。あたしがもらえる羊の毛の割り当てなんてないから。落ちてたのをくすねるしかなかった……ちよつとずつ、ちよつとずつ、集めて、何とか毛糸になりそうな量になったら、こつそり紡いで。どうにか染めの釜に紛れ込ませて。だから、こんな変なまだら」

それでも誇らしげに、イルは笑った。

「それをあなたに貸してあげる。光栄に思いなさい。時間があつたらまた来るわ。その時返して。なくしたりしたら、承知しないわよ」

それまで生きていろ、と。そんな意味を込めて男に言うと、男はまばたき、小さく笑った。

「誇り高きパールオ・ミスの子ども^{シラウ}。感謝する」

「だから、ビラウ、なんて大層な言い方はやめてよ。家つきじゃないのよ、あたし」

「おまえは心強く、恵みと守りに愛さ、」

男は言葉を不自然に途中で止め、しばらくしてから続けた。

「れるべき、者」

「恵みと守りって……」

「アーベと、ベダは、恵みと、守りの中に、名を残した」

意味がわからず、イルは首をかしげた。男はかまわず言った。

「^{ウェレ}おまえたちはみな、^{ビルト}パールオ・ミスの子。^{ミラウ}テーラの子。そして恵^ウみと守りに、愛された者だ」

1 水晶花のかけら（後書き）

ルビに苦労した……。

2・いさかい

男の言葉は、意味がわからなかった。アーベとベダは神々の子で、それだけのはずなのに。

「ウ・ウエレ恵み、ビルトと守り。言葉の音は似てる？ けど」

イルはつぶやいた。世界には、ダ・クタラ精霊の力が満ちている。ウ・ウエレもビルトも、精霊の名前だ。戦が起きた時、戦士たちは猛々（ただけ）しき大地の女神リーア・カに、そして麗（おもて）しき面たる太陽の神口ハイに祈る。そうしてウ・ウエレとビルトに幸運を願って、戦支度をする。彼らもまた、戦士に力を授けるリーア・カと口ハイの子どもたちだから。

結婚する時にもウ・ウエレとビルトは引つ張りだされる。結婚生活（はんえい）がたく守られ、子孫が繁栄（はんえい）するように。アーベとベダはリーア・カと口ハイの一番上の子どもだが、ウ・ウエレとビルトは村人たちに親しまれやすい神々の子どもたちなのだ。

「ダ・クタラ神々と精霊たち」

村に入る道の途中で立ち止まり、イルは山を仰いだ。あの男、エイ・ワン。巡礼者は精霊と親しく語らうものだと言われているが。

「でも、テーラ……って？」

その名には、聞き覚えがなかった。

村に戻る途中の道で、苦手な相手に出会った。

「あら。嫌なものを見ちゃった」

顔をしかめ、こちらを見ているのは、ラニ・ムー。カン・マの第一の夫ソル・コにより生まれた、二番目の娘である。つややかな褐色の肌に、見事な白い巻き毛、赤みがかった黄色の瞳。ラニは美しかった。そうして父親が第一の夫である事から、いばり散らしていた。クジャクカササギのようにうぬばれやで、いつも自分が物事の中心にいないければ気が済まない。イルにとっては同じ母から生まれた姉にあたるが、彼女から家族として扱われた事はない。イル自身も、相手を姉と思った事などなかった。

「汚らしいラッタがこんな所で、何をしているの。そんなみつともない姿で、よく外を歩けるものね。おお嫌だ。変な匂いがするわ」

大げさに言つて、鼻をつまんでみせる。未婚である事を示すラニの三つ編みには、様々な飾りが編み込まれていた。飾り玉はもちろん、リボンがいくつも、ひらひらと垂れている。ほっそりとした指は綺麗に手入れされており、身にまとう衣服も刺繍ししゅうのたくさん入った贅沢なものだ。成人の証である短剣は腰帯にさしてあるが、鞘にも柄にも色とりどりの飾り玉がぶら下がり、短剣と言うより装飾品にしか見えなかった。最近の自慢である革靴には、派手な模様が染め抜かれている。これ一つにゴル羊三頭が引き換えになった。靴一足に貴重な羊を三頭も引き渡すなんて、と古老たちは顔をしかめていたが、ラニも父親のソル・コもどこ吹く風だった。ソル・コの血筋は裕福なのだ。村長の跡継ぎになるかもしれない娘に、相応しい身なりをさせて何が悪い、と言つて。

跡継ぎには第二の夫、ザイ・マ・コによるケナ・ムーがほぼ決まっている。けれど二人は決して、認めようとはしなかった。ザイ・

マ・コは美しいが貧しく、後ろ楯たる血筋を持たない人物だったからだ。古き血筋で財力のあるソル・コの娘が、なぜ下につかねばならない。ソル・コはそう言い続け、今も、ラニを次期長にしようとしている。そんな父親に育てられたラニは、子どものころからわがままに育ち、鼻持ちならない性格の人物になっていた。

つぎあてだらけで体にもあっていない、古ぼけた衣服をまとうイルを見て、ラニは馬鹿にしたような顔で笑った。

「本当にみつともない。見捨てられた四番目の夫の子どもなんて、こんなものね。あたしは良かったわ。今も長に愛されるソル・コの娘なんですもの。この幸運を、麗しきロハイに感謝するわ」

せせら笑いながら言う。ラニからの嫌がらせはいつもの事なので、イルは相手にせず、さっさと通り過ぎようとした。するとラニが、「お待ち」と言った。

「籠かごの中にあるものは何？ お見せ」

「あんたに関係ない」

籠に覆いをかけておけば良かった。そう思っただけで体の影に隠そうとしたが、それより早くラニは、手を伸ばして引っ張っていた。古ぼけた籠はその力に耐えきれず、あっという間に持ち手が引きちぎられた。そのまま籠を奪われる。

「水晶花！ まあ、この時期に！」

奪い取ったラニは、中身を見て歓声をあげた。きらきら光る花びらは貴重なものだ。花の時期が終わってしまった今では、特に。

（自分のものにするつもりだ）

はしゃぐラニを見て、イルは思った。ほぞを噛む思いだった。ラニは今まで何度となく、貴重なものや珍しいものを人から取り上げ、自分のものにしてきた。父親に死に別れた幼い子どもの形見の品でさえ、気に入ったからと言って取り上げたのだ。小さな飾り玉のついた腕輪だったが、乱暴に扱われて壊れてしまい、ほどなくして捨てられた。全てを見ていたメルがこっそりと取り戻し、できる限りの修繕をしてその子に返してやったのを、イルは見ている。ラニは赤ん坊の口からでさえ、ミルクを取り上げかねない人間なのだと、その時にイルは思った。

だから、用心しなければならなかったのに……！

「返して！」

イルは叫ぶとつかみかかった。ラニはさつと籠を上げると、イルの手が届かないようにした。

「汚らしいあんたが、こんな綺麗なものを、持ってて良いと思ってるの？ こういう美しいものは、あたしにこそ相応しいわ。だからあたしがもらってあげる。ありがたいと思いなさい！」

笑いながら籠をかかげ、駆けだす。イルは後を追いかけた。

「返して！ あたしが見つけたのよ！ 返してよ！」

せつかく、メル・ムーの為に見つけてきたのに。そう思うと、目の前が真っ赤になりそうなほど腹が立った。ラニは笑いながら走っている。栄養のあるものを食べている彼女は、体つきもしっかりしていて、足も速かった。最低限のものしか食べて来なかったイルと

では、元々の体力も違う。このままでは、引き離されてしまう事は確実だった。

イルは焦った。そうして思い切り助走をつけて踏み込むと、ラニに飛び掛かった。ラニはぶざまな悲鳴を上げると、ひっくり返った。籠が手から転がり落ちて、中身がぶちまけられる。イルは急いで、こぼれ落ちた花びらをかき集めた。透きとおる花のかけらがぶつかりあって、ちりちりと音を立てた。

「このラッタ！ 何て事をするの！」

そうしていると、怒り狂ったラニに金切り声を上げられた。

「このあたしによくも、こんな事……ちょっと！ その花をよこしなさい！」

「嫌よ！ これはメル・ムーの為につんできたのよ。あんたなんかに渡さない！」

「薄汚いラッタが……！」

怒りのあまり顔を歪めたラニは、手を振り上げた。思い切りひっぱたかれて、イルの小さな体は吹っ飛んだ。

それでも、水晶花のかけらは離さなかった。

「寄越しなさいよ！」

ラニはわめいた。イルに飛びかかって殴ったり、引っかいたりする。イルは体を丸めると、胸元に水晶花のかけらを抱え込んだ。絶対、ラニなんかに渡すものか。

蹴飛ばされて髪を引っ張られ、地面を引きずり回されたが、イルはかけらを離さなかった。そうしていらだったラニが手を離し、もう一度ぶとうとした時。隙について体当たりをした。ラニは再び、

ぶざまな悲鳴を上げてひっくり返った。綺麗な服が泥だらけになり、髪飾りが曲がってだらしく垂れ下がる。散々な姿だった。いつもなら、ラニのそんな姿を見たなら、大喜びをしていたらう。でも今はそんな時間はない。イルは立ち上がると、ラニに背を向け、逃げ出そうとした。

しかし、逃げられなかった。

「なんの騒ぎだ！」

ラニを追いかけている内に、イルは村の中央まで来ていたのだ。二人が騒いでいたのは、村長の家の真ん前だった。やって来たのは、ソル・コと彼の腰巾着の男や女たち。それに村長のカン・マだった。途端にラニが、しおらしい態度を取る。

「ああ、お父さま！ お母さまも！ お助け下さい」

そう叫ぶと、父親の元へ行って泣き崩れる。

「わたくしは、何もしていないのに！ ただロハイのお恵みで、美しい花を見つけただけですのに！ それをねたんだあのラッタ、父親がおらず、素性も定かでないあの者が、わたくしの見つけた水晶花を盗んだのです。」

お母さま。偉大なる村長、カン・マよ。どうかわたくしに返すよう、あのラッタに言い聞かせて下さいまし」

全員の目が、イルの方を向いた。

イルは、唇を噛みしめた。

2・いさかい（後書き）

熱中症の後遺症？ か、体力が戻りません。いつもより短くてすみません m () m

3・心の拠り立つ場所

「可哀相に、わたしの娘。心優しいおまえを傷つけるなど、卑しいラッタにしかできぬこと。人のものを盗むなど。心根の醜いそのラッタには、鞭むちをくれてやりましょう」

泣き声を上げる娘にソル・コは美しい顔を歪め、うずくまったままのイルをちらりと見やった。娘と同じ美しい白髪はくはつに、良く手入れされた褐色の肌。赤みがかつた黄色の瞳は、彼が古い血筋の出であると示している。

「泥だらけで醜いこと。おまえの美しさを妬んだあげくの所業でしょう。なんと反抗的な目をしているのか」

側にいたソル・コの腰巾着たちも、しり馬に乗り、口々にイルをのしつた。

「おまえ、卑しいラッタのくせに。ちゃんとした家の者から何かを盗むなんて！」

「これだから、血筋のわからない者は」

「ソル・コさまは、長の第一の夫。尊い血筋の者に仇をなすなど、許しがたい」

「盗んだものをさっさと出すが良い！」

ソル・コの取り巻きたちは、血筋の古さを鼻にかけ、貧しいものたちを見下す者ばかりだった。いずれも美しい顔立ちで、男も女も着飾って財力を示しているが、イルにはひどく薄っぺらい人間に見えた。自分の意思はほとんど持たず、けたたましく騒いでいるだけの人間にしか。

それでも子どもである自分の立場は弱く、成人した彼らの立場は強い。数で来られれば、なおさら。イルは抱え込んだ水晶花のかけらを握りこんだ。渡すものか。

「これは、あたしが見つけた。あたしのものよ」

うなるように言うと、集まった者たちが、また騒ぎ立てた。

「なんと反抗的な」

「卑しいラッタが！」

「鞭で打たねば」

「曲がった性根を叩き直してやらねば！」

ラニはここぞとばかりに、哀れっぽい泣き声を上げた。

「ああ、なぜこんな仕打ちを受けねばならないのでしょうか。わたくしは何も、悪いことなどしていないのに！」

騒ぐ彼らをイルは、醒めた目で見やった。くだらない。馬鹿馬鹿しすぎて、くだらない。

ラニは、自分の欲しいものを取り上げようとしているだけ。その為に、あたしが盗みをしたと言い張っている。他の者はその言い分を繰り返して、騒ぎ立てているだけ。きいきい声を張り上げて。

この中に、まともにものを考える事のできる人間はいない。

声を張り上げさえすれば、自分の意見は通ると思っているラニ。それを当然であり、正しいと言うソル・コ。二人を賛美するばかりの取り巻きたち。

血筋のはつきりしない群れの子どもと、父親が誰であるかわかっている、家付きの子どもでは、ここまで扱いが違う。母親であるカ
ン・マにしても……。

「騒がしい」

一言、カン・マが言った。村長である彼女がそう言っただけで、皆が黙った。その場に沈黙が訪れる。

カン・マは堂々たる体躯たいくの女性で、もう何年も長の座にいた。力強く、厳しい表情を持つ彼女は、近隣の村々からも、公平で理想的な長だと言われていた。彼女が長になって以来、村から餓死者が出た事はない。畑はよく実り、狩りも順調だ。最下層の貧しい者さえ、毎日の食事にありつける。

良い長だ。皆がカン・マをそう讃え、イルもその言葉に反対する気はない。

母として考える事はできないが。

その場を見渡したカン・マはイルに目を止め、それからラニを見やると、ソル・コに目を向けて言った。

「ソル・コ。おまえの娘は、静かにしている事ができないのか」

「厳しい事を言われますな、カン・マ、わが愛エンビタしききみ。あなたの娘でもあるのですよ」

「知っている。そのラッタ。おまえの名は」

カン・マの言葉に、ラニは静かになった。咎とがめられたからではない。イルが罰を受けるだろうと期待して、カン・マの言葉を聞き漏らさないようにしようと静かになったのだ。

「イル」

黙っていようかと一瞬思ったが、ラニの期待に満ちた目を見て、イルは思いなおした。何を恥じる事があるだろうか。あたしはあたし。この村の一員。ラッタではあるが、ここで生きてきた人間だ。

誰に対しても、堂々と名乗れる。イルは顔を上げると、カン・マを睨み付けるようにして答えた。

「不作法な」

「口の利き方を知らない……」

そんなイルを見て、ソル・コの取り巻きが眉をひそめてつぶやく。卑しい子どもは卑屈に顔を伏せているべきだと、そう思っているのだ。

カン・マは続けた。

「それだけか。おまえの母の名を、父の名を告げる事はできないか。おまえは誰の子か。誰により生まれた人間なのだ、ラッタ」

彼女の言葉に、イルは頭を殴られたような気分になった。誰により生まれた人間か、だって？

あなたの子だ。

あたしは、あなたの子ども。あなたがあたしの父と契り、なした子だ。そうではないのか？

低く笑う声が聞こえた。ラニが笑っているのがイルには見えた。父親ともども打ち捨てられた子どもなど、忘れられるのが当たり前。意地悪げに光る目が、そう言っていた。カン・マはおまえの事など、忘れ果てている。おまえは結局、塵に過ぎない。くだらない存在でしかないのだと。

「あたしは」

怒りに頭に血が昇った。くらくらしながら、それでも口を開いてイルは、かすれる声で言おうとした。

「あたしは」

耳鳴りがした。がんと頭が痛んだ。

「我が家の誉れ、血筋の君。そう、いじめてやりなさるな。ラッタは卑しい交わりの中に生まれ、おのれの血筋を知らぬもの。そのような問いかけは、酷こくというものでしょう」

そんなイルの言葉をさえぎって、優雅な調子でソル・コが言った。

「尋ねた所で父の名も、母の名すら知らぬでしょう。ラッタとは、そういう者」

口調こそ優雅だが、その目は冷たく、蔑あやしみに満ちていた。

「おまえに尋ねてはおらぬ、ソル・コ」

カン・マは静かに、けれど厳しい調子でそう言つと、もう一度イルに問いかけた。

「答えよ。おまえは誰から、誰によって生まれた人間か」

ぐちゃぐちゃになつた感情が、血管を流れてゆくのがわかる。どくどくと、こめかみを、心臓を、流れてゆく。怒りが。悲しみが。叫びが。

なぜ、それを尋ねるのか。

あなたの子どもであるあたしに。なぜ。今、ここで。

認めていないのか。

認める事すら、してもらえなかったのか。あたしは。あたしと父は。あたしたちは忘れられ、捨てられて当然の存在だったのか。

あなたは、長だ。村の者に公平で。誉れよと讃えられ、近隣の村々からも、尊敬を集める者。

あなたが誇らしかった。村の者として。

あなたが讃えられるのは、うれしかった。村の誇りだと言われるたび、聞くたびに。

あなたが、あたしを見ないのはわかっていた。ラッタの群れに入られた、その事実がいつも、期待すると言っていた。それでも。

ソレデモドコカデ。アナタヲ母ダト思ッテイタ。

認メテホシイト、願ッテイタ……。

目が熱かった。耳鳴りがした。体が震えた。何かを叫びたくて、叫びたくて、たまらなかった。

しかし、イルはそんな自分を抑えた。

ちり……っ。

手のひらの中で、水晶花のかけらが刺さる感触があった。無意識に力を込めてしまったらしい。その小さな痛みが、イルに我を取り戻させるきっかけとなった。そうだ。自分はこれを、メルに渡さねばならない。

結婚のお祝いを、メル・ムーに。その為に山に登り、探して、探して、やっと見つけた。

今、あたしが一番、しなければならぬ事はなに？

一番、大事な事はなに？

ぐっ、と唇を噛むと、イルは自分の問いに自分で答えを出した。

『メル・ムーに、水晶花のかけらをあげる事』

それが一番大事。他は大した事ない。何とでもなる。今は、自分の事で泣いたり、怒ったり、している時じゃない。

馬鹿にされたからって、なに。されても良いじゃない。ずっと、そうされてきたんだから。今までと変わりやしない。忘れられているからって、それが何？

何が悲しい？ 何に傷ついてるの？ 長は長よ。母親だなんて、思う方がおかしいのよ。今までずっと、そうだったじゃない。何を期待したりしてたの。

大した事ない。

それよりも、メル・ムーの方が大切なんだから！

ソル・コの目に、鋭い光が宿った。ラニが眉をひそめる。二人の顔には、苛立ちがはつきりと現れていた。イルが顔を上げ続け、泣きも詫びもしないのが気に入らないようだ。

卑しいラッタのくせに。

ラニがつぶやくのが聞こえた。物心つくかつかないかのころから、ずっと言われてきた言葉。

卑しいラッタ。

価値のない者。

いない存在。

どこにいても、何をしていても、その言葉がついて回った。言葉にされなくとも、注がれる視線がそう言っていた。

イルがただ一人であつたなら、心が折れていただろう。ただただ上の立場の者に従順に、何も考えず、流されるままに生きて、卑屈な生き物に成り果てていただろう。血筋のはつきりしている子どもやその親たちからの蔑みは、陰湿で根深く、執拗しつようだったからだ。

けれど、イルにはメルがいてくれた。メルがずっと、イルの魂を、折れないように守ってくれていた。

『どんな人間でも、神々の祝福を得て生まれてくるの。聖典にそう

書いてあるわ。あんたは、祝福されたもの。あたしもよ。あたしたちは、自分を誇っても良いの。だって、神々の大切なものなんだから」

メルはいつも、そう言った。

『だから、顔を上げましょう。何を言われても、傷をつけられる事なんてないわ。だって、あたしたちは祝福されて生まれてきたんだもの。血筋がなに？ 父親がいない、それがなに？ 母親に捨てられて、群れで育てられたって、それがなんなの？ 傷になんてなりはしない』

『祝福されて生まれた事実には、変わりはないわ。聖典にそう書いてあるんだから』

『顔を上げて、恥じる事のない生き方をするの。堂々と』
『だって、あたしたちに傷なんてないんだから！』

メルは本当は、ラッタの群れにいらなくても良い子どもだった。けれど父親がソル・コに嫌われていたため、難癖なんくせをつけられて、ラッタの群れに放り込まれた。その後もソル・コや、彼の取り巻きに随分といじめられていた。イルもとばかりを喰った事がある。

けれどその分、メルはしなやかになり、強くなり、したたかにもなった。知恵を増し、美しさを増した。

そんな彼女がイルには、自慢だった。

そうして、そんなメルが自分を愛してくれたから。家族と呼んでくれ、大切なものと言ってくれたから。どれだけ卑しめられても、ののしられても、イルは顔を上げて立つ事ができた。自分を価値のない存在だと思わずにすんだ。一人ではないと、思う事ができた。

あたしは一人ではない。

今、この時でも。あたしは決して一人ではない。

ラニ。あんたにはわからないだろう。どうしてあたしたちが、顔

を上げ続けていられるのか。取り巻きに囲まれて、ほしいものは何でも手に入って、でもあんたには、メルがない。

あたしにとつてのメルが、あんたには、いない。

あたしには、いる。だから、傷なんて。何を言われても。あたしにはつかない。

誰もあたしを、傷つけたりなんて、できないんだから！

目の熱さをまばたきで何とかやり過ごし、あふれそうになった涙を抑えた。体の震えと耳鳴りを、息を吸って吐き出す事でどうにかした。その間も叫びだしたい心はずっと痛みを訴えていたが、それも何とか抑えた。

激情を抑えると、イルは改めてカン・マを見上げた。

それから、はっきりとした口調で答えた。

「あたしは、イル。イレ・マの七番目の子ハイ・コにより、その血筋に誉れの花を与えたカン・マから生まれた子ども。

あたしはあなたの子でもあります、長」

4・罪（前書き）

遅れました……雪がすごいです、今。

4・罪

沈黙があつた。イルにはその沈黙は長く感じられたが、実際にはさほどの間ではなかつた。

「厚かましい」

冷やかに言う声があつた。ソル・コがイルを睨み付けていた。

「盗みを働いただけでなく、長の血筋であると名乗るとは。恥を知らぬにも程があるう。そう言い立てる事で、己が罪を逃れようとも思つておるのか」

冷たい瞳の奥には、憎しみの陰りかげがあつた。

「本当に。さて。ハイ・コとは何者であつたやら。まこと長の夫であつたのか？」

ソル・コの取り巻きおとしの一人、ギレ・クが嘲るような笑い声を上げた。顔だけは美しいが、醜い表情をしていた。相手を貶めてやろうとの、思惑に満ちた顔。

「覚えているか、サリ・ク？」

同じく取り巻きである男に声をかけると、尖つた顎あごをしたサリ・クが、厭味いやみな笑顔を浮かべた。

「いたのか？ そのような者。血筋卑しく、心根も貧しい男など、いちいち覚えてなどおれぬ。長も、われらもな」

「生まれた子どもの卑しさを見れば、父親がどれほどの者だったかわかるというもの」

アレ・マの声には嘲りがまぶされていた。

「取るに足りぬ者と、すぐにも知れる」

テマ・コがそれを受けて、低く笑った。ラニも優越感を瞳に滲ませ、にやにやしながら、こちらを見ている。

「卑しきラッタ」

「血筋の知れぬ」

「恥知らずの」

「盗みをしでかして」

「あれ、あの姿を見よ」

「まこと、卑しき姿」

「薄汚く、みつともない」

「心根のごとく卑しい」

そうした言葉はさらに続き、イルの周囲で嘲り笑いと共に広がった。何事かと集まってきた他の村人たちも、薄汚れ、ぼろをまとうラッタが、長や血筋古き者たちの前に立っている姿を見ると、目をそらし、愚かなことを、とつばやいた。たかが一介のラッタが、家付きの娘や息子たちに逆らうなど。愚かなことを。言われるままに頭を下げてさえいれば、何事もなく無事に過ごせただろうに。なんと愚かなラッタなのだ、と。

「和を乱しおって」

「迷惑な話だ」

「もっと早い内に、鞭で打って躰けておけば良かったのだ。そうす

ればこんな、大それた事などしなかったろうに」

そのようなつぶやきが、村人たちの間からは起こった。ラッタとは取るに足りぬ者。村の中でも最も力なく、まかり間違えても権力を持つ者たちに逆らってはならぬ者。それが村の常識であり、この世界の常識でもあったからだ。

「あれは盗みをする。羊の毛をくすねた。われらの財産を」

「知っているぞ。ラッタに羊の毛の割り当てはない」

「それなのに、毛糸を紡いでおった。盗んだのだ」

「手癖の悪い……」

「パンを盗んだ」

「毛布を盗まれたと、わめくものを見たぞ」

「感謝の日に山に行つて、食べものを取つておった」

「罰当たりな」

「祈りもせずに、遊び呆けて」

「性根の腐つた者は、どうしようもない」

尖った視線と悪口が、周り中から浴びせられる。それでもイルは、顔を上げていた。決して、伏せようとはしなかった。黙って長を見上げていた。

恥じる事などない。

自分には、恥じる事などない。

生きるために、多少の悪さはした。ラッタの群れに渡される食料や衣服は、何かあればすぐに切り詰められ、減らされる。家のない者の群れ、しかも子どもの群れに渡すものだ。差配するものの都合や悪意で、どうとでもされてしまう。ラッタの群れの子どもたちはいつも、生き延びるために目を光らせ、食べものを探し、毛布や衣服といった、生活に必要なものを漁らねばならなかった。

落ちた羊の毛を集めて毛糸を紡ぐのは、ラッタには良くあること

だ。毛布をくすねたこともあった。ラッタの群れに渡されるはずだった古着や毛布がある年、名のある家の息子や娘たちの善行を示すために、よその村々に配られたからだ。あの年、凍えて、群れの子どもが三人死んだ。

聖人と女神の日に感謝をせずに、野山に行つて山菜や果実を摘んだ。ずっと飢えていた。自分も飢えていたが、同じ群れにいる子どもが熱を出し、けれど食べるものが何もなかった時。何でも良いから、何か食べさせてやりたいと思った。あの年は、祭りに備えて食料を切り詰めようと誰かが言い出して、なぜかラッタの群れに渡されるはずの食料が半分以上にされた。家付きの子どもたちの食料は、そのままだったのに。なまけてばかり、盗みばかりの子どもには、罰になるからちようど良いだろうと言われた。やせ細り、目ばかりが大きくなったその子を見て、どうにかしなければと思った。食べものをくれと頼みに行ったら、殴られて追い払われた。古くなつて捨ててあつた食料を漁ろうとしたら、盗みをしたと叫ばれた。だから祈りの日だったが、決まりを破った。野山に行き、食べものを探したのだ。

罪だと言つのなら、認めよう。

神々が罰を与えと言つのなら、受けよう。

ひざまづけと言つのなら、そうする。はいつくばれと言つのなら、そうする。それで、食べ物や古着が手に入るなら。

けれど。

この水晶花のかけらを見つけたのは、自分だ。メルのために、半日かけて探して見つけたのだ。

それだけは、はっきりと言える。

だから、今。この時。顔を伏せ、うなだれるなんて真似は……、絶対にしたくない。

「いい加減に、わたくしのものを返しなさい！」

人々の嘲りに力を得たのか、ラニが大声を張り上げた。

「おまえの盗んだ水晶花は、わたくしが見つけたものよ。ラッタの触れて良いものではないわ。お返し！」

「これはあたしが見つけたもの。あたしが探してきたものよ。あんたは、これがどこにあったかすら知らない」

イルは言い返した。

「このラッタが！」

怒りに顔をゆがめたラニが、いきなり飛び出し、駆け寄ってきた。そうして手を振り上げ、思い切りイルを引っぱらいた。周囲から、わつと声が上がった。笑い声が聞こえた。よくやったという声もあった。

衝撃に目がちかちかして、ひっくり返りそうになったが、イルはふんばった。倒れたりするものか。

「水晶花をおよこし！ あたしのものをよこすのよ！」

「あんたのじゃない」

イルは繰り返した。

「これは、あんたのものじゃない」

きつとまなじりをつり上げたラニが、もう一度手を振り上げる。やって来る痛みを覚悟して、イルは身構えた。

けれど、その手は振り下ろされはしなかった。

「やめよー！」

人々を黙らせ、思わず居住まいを正してしまわせるほどの、威厳ある声だ。ドナの村の長であり、裁きをも司るカン・マの声だ。その場に響いたからだ。

5 分かれた道（前書き）

第一話 水晶花のかげら メルの嫁ぐ村の名前を変更しました。

5・分かたれた道

何事かと思った。

メルが騒ぎに気づいたのは、赤小麦の収穫を終えて、今日の分の割り当てをもらい、畑から帰ろうとした時だった。夕闇が迫っていた。一日の働きで疲れていたが、それでも少しの喜びと達成感があった。成人した事で、人間として見てもらえるようになった。割り当てがきちんともらえるのだ。

家を持たぬ子ども（ラッタ）は、人として見てもらえない。成人してそれが、良く分かるようになった。みな口では、家を持たぬ者に慈悲を示さねばと言う。けれどそれを実行している者は、あまりいなかった。渡されるはずの割り当ては、平気でかすめ取られている。文句を言いたくても、ラッタの身分では何か言う事もできない。そうしていつも、汚いものを見る目で見られる。

それでも昔よりは、ラッタの扱いは良くなっているらしい。ジョー・マ・コに聞いた話では、昔はラッタは売り物も同然で、ラッタ出身の者も、労働力として売られたのだそうだ。今は、カン・マにより、ラッタを売り買いする者は厳罰に処される。ラッタ出身の成人も、村の一員として扱われるようになっていた。

待遇は良いとは言えないが。

腕についた傷をさすった。嫌がらせで後ろから突き飛ばされ、持っていた鎌で切ってしまったのだ。幸い深手ではなかったが、突き飛ばした者たちからは、『なんて不器用な』とささやかれ、嘲られた。

ラッタの群れで育った者は、成人してからも何かと見下される事が多かった。そうして、何かあれば、暴力をともなった嫌がらせを受ける。

良い働きを見せれば、生意気だと言われて殴られる。人前で評価されれば、良い気になるなど言われ、借りている鎌や鋤といった道具を壊される。命の危険を感じた事もあった。

婚姻が決まってから、目立った嫌がらせは減ったが、今日のような、突き飛ばされたり蹴られたりといった嫌がらせはなくならなかった。

それでも自分は成人している。働いて、一日の割り当てを、手に入れる事ができる。

メルはちら、と背後を見やった。畑の中に、落ち穂を探す、痩せた子どもたちの姿が見えた。

麦を刈り取って束ねる作業の途中でこぼれた落ち穂は、ラッタの群れの者が食べて良いことになっている。だから収穫をしながら、彼らが落ち穂を拾えるように、こぼしておいた。あまりあからさまにすると叱られるので、あくまで少しだが。

自分の後ろを、食い入るように見つめている子どもの姿があるのには気づいていた。

自分もそうだったからだ。

優しい人の後ろには、落ち穂が良くある。だからできるだけ、そういう人の後について回るようにした。そうして、一日の食事をどうにか確保した。

そういう優しい人はなぜか、ほとんどが、かつかつの暮らしをしている人たちだった。自分も飢えたことがあるからだろうか。痩せた子どもがそつと隠れているのを見つけても、追い払うこともなく、拾えと言わんばかりに落ち穂をこぼす。逆に裕福なものは、うつとおしいとか邪魔だとか言って、ラッタの子どもを見つけ次第、棒で叩いて追い払うのが常だった。

畑をうろつく子どもたちの姿にいつも通りと思ったが、そこでふと眉をひそめた。イルの姿がない。

(どうしたのだろう)

いつもなら、自分の割り当てられた畑の近くで、落ち穂を拾ったり、羊の毛を集めているのに。あの子は意志が強く頑固で、けれど優しい。弱い者、しいたげられている者のために、泥をかぶることも厭わない。集めた落ち穂も、弱い群れの子どもに分けてやっている。

だからいつも、お腹をすかせている。

なぜだろうと、いつも思う。なぜラッタの群れに、十分な食料が行き渡らないのか。家付きの子どもたちには、捨てるほどに与えられているのに。

なぜ弱く幼いもののために、自分の食料を分けているイルは罪深い怠け者と呼ばれるのか。おのれの分け前を多くするために、ラッタに渡す食料を減らす差配者たちは、正しい者と呼ばれているのに、ずつと疑問だった。成人し、村の一員と見なされるようになってからも、この疑問は胸の奥でくすぶり続けていた。

「メル、かわいいひとチャミ。君は疑問ばかりだね。どうしてそうも、不思議がつてばかりなの？」

友人であるケナは、呆れたように言った。長カン・マの家ヒつきの子どもではあったが、父親が第二の夫であったケナは、肩身の狭い立場にあった。ケナの父ザイ・マ・コは、他の夫たちと違い、貧しい家出身で、後ろ楯を持たない人物だったからだ。「マ」の音が表示ように、一度別の者と婚姻を結び、母として子をなしている。カン・マとは二度目の結婚という事実も、立場を弱くした。

父親の立場が弱いためか、子どもころからケナは、貧しい家の者たちと一緒に働いていた。メルとは血筋が近かったこともあり、小さな時から顔見知りだった。メルの母親が、ザイ・マ・コの最初の子どもだったからだ。メルの両親が亡くなった後、ザイ・マ・コはメルを引き取るうとしたが、他の夫たちからの嫌がらせで、メル

はラッタの群れに入れられた。ケナはよく、ラッタの群れにいるメルのために、古着や食べものをこっそりと持ってきてくれた。

『君の言うのは、当り前の事ばかりじゃないか、チャミ。不思議に思っているのは、おかしくないかい』

『どうして当り前だと思うの』

『ずっとそうしてきたからさ』

『誰が決めたの。あたしにはわからない。飢えていたのに自分の拾った落ち穂を小さな子に分けてやったイルの方が、見下した目でパンを投げて寄越したグレ・クよりも、正しい者に見える。ケナ。あたしたちが正しいと、当り前だと言っていることは、本当に正しく、当り前のことなの？』

『じゃあ、メルはどうしたいの』

『わからない。でも、考えたい。どうすれば、何をすれば、一番良い道に進めるのか。誰にとっても良い方法はあるのか。それは、何なのか。あたしは、考えたいのよ』

ケナはううん、とうなった。けれどやがて、メルの言葉に次第に引き込まれたようだった。二人はよく、夜遅くまで話し合った。

彼女が成人し、ケナ・ムーとなった時。メルは結婚を申し込まれた。いつか、一緒になってもraitaito。

その夢は、ケナが長の後継者に選ばれた時についてたが。ただでさえ立場の弱いケナが、村の長の後継者の立場をしつかりとさせるためには、ラッタ出身の連れ合いなど、いてはならなかった。隣に立つのは名家の、家付きの息子でなければならなかった。

別れはメルから言った。ケナは何も言わなかった。

その後でメルに、ハイ口の村から婚姻の申し入れがあったのは、皮肉な事だった。ハイ口は開拓によってできた、歴史の浅い村だったが、急速に力を増してきた村でもあった。ラッタ出身でもかまわないと、その村の裕福な家から打診があったのだ。メルはそれを受

けた。

ケナは、ただ目を伏せていた。

広場に集まっている人々を見て、不審に思った。近づくと、ケナがいた。強張った顔で中心にいる者を見つめている。カン・マに良く似た灰色の髪に、赤みを帯びた褐色の肌。

「ケナ？ 何があつたの」

声をかけると振り向き、メルに気づくと急いで近寄ってきた。常には優しい黄褐色の瞳が、焦燥に揺れている。

「メル。家に戻れ」

「なぜ。これはなんの騒ぎ……」

「良いから。関わるな」

ケナがそう言った時、「いい加減に、わたくしのものを返しなさい！」という金切り声が聞こえた。

「おまえの盗んだ水晶花は、わたくしが見つけたものよ。ラッタの触れて良いものではないわ。お返し！」

ラニ、とメルはつぶやいた。誰かにまた難癖をつけているのか。そこで聞こえてきた声に、メルはぎくりとした。

「これはあたしが見つけたもの」

意志の強さをひそめた声。良く知った者の。

「あたしが探してきたものよ。あんたは、これがどこにあったかすら知らない」

「イル……!？」

慌てて人込みをかき分けようとしたが、ケナに腕をつかまれた。

「だめだ、メル。君は、じきに婚姻を結び、家を継ぐ身だ。騒ぎに巻き込まれるんじゃない」

小声で言われた事に、メルはかっとなった。

「イルはあたしの妹分よ。それを見捨てろって言うの!」

ケナの腕を振りほどこうとした時、「このラッタが!」と叫ぶラニの声がした。続いて、ばしっ、という音。

イルがぶたれたのだ。

「離して、ケナ」

「離さない! メル、チャミ、君はやっと、幸せになれる所なんだ。幸せにならなきゃならないんだよ」

どこか悲痛なものを秘めた声に、メルはケナを見やった。幼なじみで、かつて一緒になろうと約束をした、そうして別れを告げた相手。

「あたしに傷はつかない」

はっきりと、一言一言を区切るようにして、メルは言った。

「ラニがどんな人間か、知っているでしょう、ケナ。あんたこそが、

知ってるはずよ。身近にいて、標的にされてきた、あんたなら。あたしは妹を助ける。その行為をどれだけ嘲られようと、貶められようと。あたしに傷はつかない。むしろ誇りに思う」

「メル、」

何か言おうとした相手をさえぎり、メルはきっぱりとした態度で言った。

「その手を離さない、ケナ・ムー。あんたの思惑で、あたしの誇りを汚さないで」

ケナの目に、傷ついた色が浮かんた。

優しい人なのだ。

腕の力が弱まったのを感じながら、メルは思った。この人は、優しい。

共にいたかった。

共に年を取り、子どもや孫の名前を呼んで。貧しくともそれなりの暮らしをしたかった。そんな夢を見た。でも。

力の抜けたケナの腕に手を添えて外すと、メルは前を向いた。一歩を踏み出す。

夢は、終わった。

あたしたちの道は、もう別れてしまっている。

6・権利と義務

「ラニ・ムー。おまえには、耳がないのか」

その場は静まり返っていた。はやし立てていた者も口をつぐみ、長であるカン・マをうかがった。

「耳はあります、お母さま」

ラニはカン・マの方に向き直ると居住まいを正し、両手を組み合わせ、首を垂れ、従順な娘の姿を取った。

「ではなにゆえ、わたしの言葉に従わぬ」

「従っております、お母さま」

「ほう。では答えよ。今、わたしは何をしていた？ ソル・コの娘よ」

厳しい表情の長をちらりと見やり、ラニは目を伏せた。

「お母さまは、……卑しいラッタに罰を与えようとしておいででした。わたくしも、それには賛成です。わたくしは、」

「黙れ。おまえの意見など聞いておらぬ」

カン・マは鞭のような声音で、ラニの言葉をさえぎった。

「おまえの目にはそう見えたか。おまえの耳にはそう聞こえたか。わたしが、ラッタに罰を与えようとしていた、と？」

それから一言一言を、区切るようにして尋ねた。ソル・コがたじ

ろいだ。口を挟もうとしたが、それより早くラニが答えた。

「はい、お母さま。このように恥知らずの、盗みを働くラッタには、罰を与えてやるのが順当というもの」

「おまえの意見は聞いておらぬと言ったはずだ。さかしらぶって、このわたしに指図をするつもりか。おまえはこの村の長、カン・マよりも偉いのか」

最後の言葉は、触れれば切れそうなほど鋭い響きを帯びていた。ラニはびくりとなり、ソル・コは青ざめた。

「ソル・コ。おまえが子どもをどのように育てようと、わたしは口を出さずに来た。だが、これは何だ。村の長をないがしろにし、指図をしようとするなど、おまえは娘をどのように育てたのだ」

「長には……お腹立ちをどうか、お静め下さいますよう。ラニは心優しい娘にございます。大切なものを盗まれて、心が動転しているのでございます。決して長を、ないがしろにしようなどとは」

ソル・コは青ざめながらも、品の良い、柔らかい声で答えた。

「ほう。では、なにゆえこの娘は、わたしの邪魔をして騒ぎ立てた」
「邪魔など……」

「わたしは今、何をしていた？ ソル・コ」

ソル・コは唇を噛みしめた。何と答えれば良いのか。娘と同じ返事をすれば、余計に立場が悪くなる。

「ラッタに……話しかけておいで、でした」

どう答えれば良いのかと迷った後に、おそろおそろ、ソル・コは

答えた。

「そうとも。わたしは、その子どもに話しかけていた。その者の話を聞こうとしていたのだ。騒ぎ立てる娘に邪魔をされたがな。しかもその娘は、わたしが判断を下すよりも先に、自分の手で処罰をしようとした」

冷然と、カン・マは言った。

「この娘は目が悪く、耳も役に立たないようだ。誰が長であるかもわからぬ様子。まことにこれで、村の一員、成人した者と言えるのか。短剣を腰にさしてはいるが、取り上げた方が良いのではないか」

それはこの村では、やつかい者に成り下がる事を意味する。成人の短剣は、村の一員である事を示すもの。病や怪我で働けなくなつた者からですら、取り上げるような真似はしない。成人の短剣を取り上げるのは、よほどの罪を犯したか、追放処分にされる者に対してのみの事なのだ。

「長、お慈悲を。若い娘のちょっとした過ちではありませんか」

ソル・コは真つ青になっている。ラニもまた。

「それに、相手は盗みを働いたラッタ……」

「黙れ、ソル・コ。おまえまで、わたしに指図しようとするのか」

厳しい声音で言われ、ソル・コは黙った。するとそこで、一人が進み出た。

「長に申し上げます」

進み出たのは、ソル・コの取り巻きであるアレ・マだった。

「盗みを働いたラッタはまだ、長の前に立っております。それをさ
ておいて、尊き血筋の娘の瑣末^{さまつ}な過ちを取り沙汰するのは、本末転
倒にございましょう。まずは、そやつに罰を与え、村の規律を守る
事こそが肝心でございます」

「その通りにございます。元はと言えば、そのラッタが罪を犯した
のが全ての元凶。ラニ・ムーは被害者にございます。盗まれたもの
を取り返したい、その一心での出来事」

ギレ・クもまた、進み出て言った。ソル・コや、彼の娘のラニ・
ムーの立場が悪くなれば、自分たちの立場も悪くなる。それゆえ、
彼らは長の怒りを逸らそうと必死だった。

「悪いのはそのラッタ。長には、公平な視点での判断をお願いした
く存じます」

テマ・コが言った。彼の血筋もまた古く、村では高い身分を持つ
ている。男性体に変化したとは言え、発言は重く受け取られる。

「あたしは盗んでいない！」

このままでは、なしくずしに自分が盗みをした事にされてしまう。
手の中の水晶花のかけらを壊さないように、けれどしっかりと握っ
てイルは叫んだ。

「これはあたしが見つけたもの。取り上げようとしたのはラニの方
だ。あたしは、盗んでいない！」

「だまれ、ラッタ！ 卑しい身分の分際で！ おまえが盗んだに決

まっているであろう。いつもいつも、何かしら盗みを働くおまえのような卑しいものの言葉など、誰が信用できよう！」

ソル・コが怒鳴った。アレ・マがイルを睨み付けた。

「食べものを与え、着るものを与え、生かしてやっているわれらに対し、感謝の念も持たず。盗みを働き続ける。われらの慈悲にも限界があるぞ。おまえたちラッタはこの村の汚点。一人残らずいなくなれば、もう少しすっきりとするであろうに」

「村から追い出してしまうえば良いのだ、このような盗人は。尊き血筋の者に頭を下げる事もできぬ。このような不遜な輩は、野山で獣に喰われてしまえば良い」

ギレ・クがふんと鼻を鳴らした。そうだそうだ、という声が上がった。ラッタなど追い出せ、という声もした。

「だがそれを決めるのは、おまえたちではない」

そこでぴしりと、厳しい声があった。

「静まれと、わたしは何度、おまえたちに言えば良いのか」

声は落ち着いており、良く響いた。人々は、思わずカン・マを見つめた。

灰色の髪に黄褐色の瞳、褐色の肌の女性。カン・マは、ただ立っているだけだった。それなのに彼女からは、言葉を飲み込み、頭を下げたくするような雰囲気立ち昇っていた。強く、厳しく、母であり、裁き司でもある村の長。さほど大柄なわけではない。彼女よりも体格が良く、猛々しい戦士は、探せばいくらでもいるだろう。彼女より賢い者も、美しい者もいるだろう。それでも、彼女こそが

長だった。従わねばならないと思わせる威厳と、智恵に裏打ちされた強さが、彼女を彼女たらしめていた。

ソル・コたちの言葉によって煽られ、騒ぎだそうとしていた人々は、カン・マの言葉と姿に、一瞬にして頭を冷やした。その場が静かになる。

ソル・コはすぐに恭順の姿勢を取った。ギレ・クとテマ・コは顔を見合せてから慌てたように頭を垂れた。アレ・マは一瞬、長をすさまじい目つきで睨んだが、同じく恭順の姿勢を取った。

「長に申し上げます」

そこに、凜とした声が上がった。人々が振り返る。

「前に出よ」

カン・マの言葉を受けて、人影が進み出る。周囲の村人が彼女を通す為に左右に別れた。

艶やかな褐色の肌。柔らかく渦を巻く白髪。優しい黄褐色の瞳。

「メル姉[↑]」

イルはつぶやいた。愕然とした顔になっていた。

だめだ。

ラッタの出だと言う事で、ただでさえ陰口を叩かれるメル・ムー。婚儀が決まってからも、妬みからの嫌がらせが続いていた。イルは知っている。自分より下だと見なしていた相手が幸運を得たと知った時、村の『正しい』者たちが、どれだけ容赦なく相手を傷つけるか。今も彼女の手には、切り傷ができていた。また嫌がらせをされたのだ。

それなのに、こんな目立つ所に出てくるなんて。

「イル、チャミ。何を泣きそうな顔をしている」

進み出てきたメルは、イルの側に来ると低くささやいた。イルは泣きそうな顔で首を振った。

「メル姉[↑]。なんで……あたし、迷惑かけるつもりじゃ」

「妹分の為に力を尽くすのが、姉の仕事。迷惑だなんて思わない」

小さく笑うとメルは、ぽんぽんとイルの肩を軽く叩いた。それからラニを見やる。

ラニは、すさまじい目つきでメルを睨んでいた。

「名乗るが良い、娘よ。わたしに何か言いたい事があるのか」

その様子を見ていたカン・マが、静かに問うた。メルは手を組み、頭を垂れると答えた。

「長。わたくしは、メル。ケル・コにより、ザイ・マの子メイ・マの誉れとして生まれた者。二年前に、この村にて成人した娘[↑]にございます」

「ラッタの出身だ。ケル・コもそいつもな！」

誰かが後ろから怒鳴った。それを無視して、カン・マは言った。

「成人の短剣を持つ、ドナの村の働き手の一人。おまえは立派に村に貢献している。メル・ムー。顔を上げよ。言いたい事を述べるが良い」

もう一度頭を下げると、メルは顔を上げた。

「申し上げます。わたくしは先ほどまで、畑にて働いておりました。仕事が終わりに、家に帰ろうとした所で、この騒ぎに気がつきました。わたくし以外にも、仕事の後でここに来た者は多いはず」

一度、言葉を切ってから、メルは続けた。

「盗んだ、盗まないとおだやかならぬ言葉を聞きましたが。後からやって来たわたくしには何が起きたのか、見当もつきませぬ。

ラッタとは言えこの子どもも、あと何年かすれば、村の一員となる者。働き手の一人となる者です。村の掟を学ぶ為にも、順序立てた説明を聞き、理解する機会を与えるのが、この子どもには良い事かと存じます。

どうか起きた出来事を最初から、わたくしたちに話していただけませんか。そうすれば、何が原因でいさかいになったのか、この子どもにもわかると思います。今のままでは何が悪いのかもわからぬまま、子どもは意地を張るばかり。知恵と慈悲をもって、何が原因であるのか、話して聞かせるのも大人の役割と存じます」

ラッタであるイルや、ラッタ出身の自分自身の立場を悪くしないように腰を低くし、物事の理解ができない子どもとした事という印象を与えながら、いさかいの原因の説明をメルは求めた。カン・マの目にちらりと、面白がるような影がよぎった。

「知恵を持たぬ子どもに善悪の区別を話して聞かせ、悟らせるのは、確かに大人の役割ではあるな」

カン・マはそう言うところ、コとラニに目をやり、口の端を微妙に持ち上げ、うなずいた。

「よかるう。ドナの村の者よ。聞くが良い。幼子二人のいさかいがあり、われ、カン・マは二人の言い分を聞いてそれを裁く」

響く声に、村人は背筋を伸ばした。村で起きた揉め事を裁くのは、長の仕事だ。カン・マは略式であるが、ここに裁きの場を設けると今、宣言した。

メルの方が小さく震えた。笑いかみ殺したようだ。イルは何だと思い、ついで思い当たった。

『幼子二人のいさかい』

なんて事だ。長は、成人したはずのラニを、道理のわからぬ子ども扱いした。

「長の杖を持て、ケナ・ムー」

声をかけられて、ケナはびくりとした。慌ててソル・コの方を見る。

「お母さま！ それはわたくしの権利です！」

ラニが叫んだ。長の権威をあらわす道具である『長の杖』は、常には長子が運ぶ事になっている。

「おまえは、いさかいの当事者ではないか、ラニ。杖は公平さをあらわすもの。この場にて待て。それとも、わたしの言葉が理解できぬか」

「わたくしの権利を侵害する事は、誰にもできません！ わたくしは、お母さまの長子です！」

「ケナ・ムーはわたしが選んだ後継者。杖を運ばせるのに何ら問題

はない。何をしているか、ケナ。急げ。おまえの義務を果たせ」

言われてケナは、背筋を伸ばした。そうしてさっと駆け出した。ラニが金切り声を上げる。

「何という事！ わたくしの権利を！ わたくしは長子であるのに！ あれは第二の夫の子ではありませんか！ わたくしは第一の夫の子！ わたくしにこそ権利があるのに！」

「わが君！ 娘の権利をなにゆえに侵害なさるか。あれは第二の夫の子であつて、杖を運ぶ権利など持たぬ者。どうか撤回なさつて下さいまし！」

ソル・コも叫んだ。彼はずっと、ラニを後継者にしたがっていた。ケナ・ムーが後継者としてほぼ決まった後も、文句を言い、反対し続けていた。それなのにここで長は、「わたしが選んだ後継者」とはつきりと口にした。

「撤回なさつて下さいまし！」

「わたくしには権利があるのに！ わたくしのものなのに！」

カン・マは何も言わない。

「やみくもに権利を主張する者と、その前に義務を果たす者。どちらが次の長に相応しいかは、それだけでわかる」

小さくメルがつぶやき、イルは彼女を見上げた。その表情に何かを愛おしむような、傷ついたようなものを見つけて、心が痛んだ。ケナとメルの間で起きた事は、イルも知っていた。二人が一緒になれば良いと、そう思っていた。

「あたしはメルが一番賢いと思う。ハイ口の村はきつと、栄えるよ」

けれどそれは、自分が言っただけの良い事ではない。だからただ、そう言った。メルはイルを見下ろすと、苦笑のようなものを顔に浮かべた。

やがてケナが駆け戻ってきた。カン・マに長の杖を手渡す。ラニはそれを見てさらに声を張り上げ、ソル・コは苦々しげにケナを睨み付けた。

「娘の権利を奪う者よ……身分低き父を持つだけはある。分を弁えぬ愚か者」
わきま

吐き捨てるように言うソル・コの眼差しは憎しみに満ちており、イルはぞつとした。ケナを見据えてはいるが、彼の目には、別の人間が映っているように思えた。

「哀れな方」

ぽつりとメルが言い、イルは彼女を見上げた。メルは視線に気づき、身をかめた。

「気の毒な方なのよ」

「ソル・コは綺麗な服を着て、ごはんも毎日食べているのに。何がかわいそうなの？」

「大人には色々あるの。そのうち、イルにもわかる」

メルはただ、そう言った。

ケナから杖を受け取ったカン・マは、その杖を大きく振り上げた。どん、と地面に杖をつく、声を張り上げる。

「わが名はカン・マ。ドナの村の長。掟の長にしてこれを守り、村人の長にしてこれを守る、ドナの母にして裁きの司である。村人よ、聞け。ここに、裁きの場を開く。訴え出しは、ソル・コの娘ラニ・ムーと、ハイ・コの子、イル。われ、カン・マは二人の言い分を聞いてこれを裁く」

裁きが始まった。

7・鞭打ち（前書き）

この世界では名乗る時、母親側の血筋が優先されますが、公平であるべき長や、さばき司、神職などの役割の者が公的な場で呼び掛ける場合、自分の子に対しては父親、もしくは祖母の血筋の子として呼びかけます。自分の子であっても、他の村人と同じく、公平に對するという姿勢をたもつ為です。

7・鞭打ち

ラニ・ムーは苛立っていた。何もかもが気に入らない。

なぜ。なぜ。なぜ。

なぜ、長の第一の夫の子、長子である自分を差し置いて、第二の夫の子風情が長の杖を運ぶ。

それが後継者に選ばれる。

しかも、ラッタまで逆らう。水晶花のかけらを自分に寄越そうとしない。この強欲者たちが。

美しいもの、価値のあるものは、血筋の正しい者に捧げられるのが当然のはず。このラッタはそれに逆らって、自分のものにしようとしている。

そうして、メル。ラッタ出身のくせをして。

いつもいつも。あたしより目立つ場所に立つ。

血筋の定かではない、はるかに劣る存在であるくせに！

「身分に相応しく、はいつくばっていれば良いものを……！」

ラニは隣にいる二人を睨んだ。血筋正しい自分に逆らうという罪を犯した、卑しいイルとメル・ムーを。それからケナ・ムーを睨み据えた。長子である自分の権威に挑戦しようとする、劣った存在であるはずの異父妹を。

正しきは自分。

許せるはずがない。

「ハイ・コの子はいまだ成人ではなく、正式な村の一員ではない。それゆえこの裁きの場にて、後見を立てる。その者はハイ・コの子

の言葉に責任を持ち、行動に責任を持つ。そうして裁きがどのようなものであっても、これにも責任を持つ。

メル・ムー。その責任を引き受けるか」

「はい」

長に問われ、メルはうなずいた。

「ハイ・コの子、イルの後見をつとめよ」

「メル……」

イルは、転がっていた籠に水晶花のかけらを入れ直し、胸に抱えた。手に持っていたは、壊しそうだと思ったのだ。持ち手がなくなっていたので、両手でしっかりと抱え込む。取り上げられないように。すると、憎々しげな眼差しをラニから注がれた。

後見、という言葉の意味はわからなかった。長の言葉に不安になって、小さな声で名を呼ぶと、メルは妹分に大丈夫だとうなずいて見せた。

「メイ・マの子メルはこの場において、ハイ・コの子イルの後見をつとめます」

静かに彼女は言った。

カン・マは再び、杖を地面に降ろした。どん、という音がした。

「長の杖は公平である事を示すもの。長の杖は太陽と大地の間に立つもの。そうして長の杖は、一大いなる父ロハイロハイ（ダル・コー＝ロハイ）の恵みと、一麗しき母リアリア・カ（ケン・マー＝リア）の力により、長が長たることを示すもの。ゆえにこの杖の前で、偽りを述べることは許されぬ。

さて。では聞こうか。そもそも、いさかいの原因は何なのだ。偽

りなく述べよ、ソル・コの娘ラニ」

「そのラッタが、わたくしのものを盗んだのです」

ラニは言った。きっぱりとした口調だった。彼女の中ではそれは、真理となっていた。自分にこそ権利のあるものを、強情を張って渡さないのは、盗みと同じ。許しがたい罪だ。彼らは罪深い存在だ。ラッタも、ラッタの味方をするメルも、長子の権利を出し抜いて手に入れようとしているケナも。

だからこそ、発言にためらいはなかった。自分は正しい。正しい事を言っているのに、なにをためらう事があるだろうか。

「わたくしに権利のあるものを、早く戻していただきとつございます」

堂々として発言する姿は、誰の目にも、それなりに感銘を与えた。ラニは姿も美しく、言葉づかいもきちんとしている。それらが相まって、正しいことを言っているように見えた。

「あたしは、盗んでなんか！」

対してイルは、ぼろぼろの衣服に汚れた姿、言葉づかいも乱暴で、盗みをするとか陰口を叩かれるラッタである。何を言っても悪事を働いているようにしか見られない。周囲のイルを見る目は冷やかで、早くこの子どもに罰が与えられないかと期待している者までいた。

「騒ぐな。発言を許されるまで口を閉じていよ」

カン・マが厳しい口調で言った。

「でも、あたしは盗みなんか！」

ラニのまなざしも、態度も、蔑みに満ちていた。自分への蔑み、大切なメルへの蔑み。

村人からのひそひそ声と、冷やかなまなざし。

嫌だった。

もう、嫌だった。

「ラニは嘘つきだ！　嘘ばかり！　人のものを盗んではかりはラニの方じゃないか！　みんな知ってるくせに！」

「わたしは騒ぐなど言った。長の言葉に従えないのか」

「嫌よ！　黙らない！　あたしは盗んでない！　盗んでない！」

負けてなるものか。その一心でカン・マを睨み、吠えるように叫ぶ。叫ばねば、誰にもこの声は届かない。誰も自分の言うことなど聞いてはくれない。今までの経験から、イルはそう思った。だから叫んだ。

「悪いのはラニだ！　あたしは盗んでない！　盗んでない！」

長が顔をしかめた。メルがイルの腕をつかむと、自分の方に引き寄せた。

「イル、静かにしなさい！　今は裁きの時。長の言葉を聞いて。あの方の言うことに従うのよ！」

厳しい声で言った。イルは、メルにまでそう言われて、裏切られたと言わんばかりの顔になった。

「嫌よ！　だつてメル……、だつて！」

そう叫ぶと、ラニが笑った。

「愚かなラッタ。村の決まりも守ろうとしない。罪深きは明らか。裁くまでもないのでは？」

聞こえよがしに言われたことに、頭に血が登る。うなり声を上げてイルは、ラニに飛び掛かろうと身構えた。そこを、ぐっと腕を捕まれて止められる。

「放してよ、メル！ あいつをぶん殴ってやる！」

「静かにしろと言ってる、イル！ ここは裁きの場なのよ！」

「そんなの関係ないっ！ 知るもんか！ どうせラッタが悪いって、ぶたれるだけなんだから！ 放せ！ 放してよ、メル！」

どん！ と音を立て、長の杖が大地に突き立てられた。

「静まれ、愚か者よ！」

カン・マが大音量で叫んだ。びりびりと、大気が震えた。彼女の顔にははつきりと、怒りの表情があった。背を伸ばして立つ全身から、凄まじい気迫があふれ出している。持っているのは杖であるのに、抜き身の剣を持ち、戦いの場にいるかのような。それほどに凄まじい気迫だった。それがその場にいる者、全てを圧していた。

「メル・ムー。前に出よ」

静かになったその場に、長の声が響く。鋼のような声だった。はっ、と顔を上げて、メルはイルを置いて前に進み出た。

「おまえが庇護するその者は、長に従うつもりがないのか」

「いいえ、長。幼くて混乱しているだけです。どうかこのまま、この場にて裁いていただきとう存じます」

「警告はした。にも関わらず、騒ぎ続ける。幼いとは言え、分別すら持たぬのか」

長の言葉は厳しかった。イルは慌てた。なんだか良くわからないが、自分のせいでメルが叱られている。

「メルは悪くない！ 叱るならあたしにしてよ！」

メルに駆け寄って叫ぶとカン・マは、じろりとイルを見やり、メルは肩を落とした。なに？

「分別のないにもほどがある。愚かな子どもよ。この場は裁きの場。成人した者が立つ場所。半人前のおまえは本来、ここに立つ事も許されぬ。だがメル・ムーが後見を申し出たゆえ、わたしはおまえがここに立つ事を許した」

鞭のような声音でカン・マは言った。

「であるのに、おまえはわが言葉に従わず、この場が何であるかも知ろうとせず、杖に対しても敬意を払わず、自分の思いのままに振る舞う。」

愚か者。愚かな子ども。

後見とは、単に側にいるだけの役割ではない。おまえの発言、おまえの行動、その全てに責任を持ち、おまえが悪さをした時には、その罪を自分のものとして引き受ける覚悟をしたと言うこと。

であると言うのにおまえは、騒ぎ続ける事でこの者のその覚悟を足蹴にし、さらに悪い立場に追い落とそうとし続けている。わたし

の許しなく発言を繰り返し、おのが要求を言い続ける、裁きの場であるうとなかろうと決まりを守ろうとしない。その態度がどのような結果を生むか、その目で見えるが良い。

ケナ・ムー！ 鞭を持って！」

ケナ・ムーの顔が引きつって青ざめた。しかし彼女はすぐに、鞭を持って来ると、長の前に立った。カン・マはメルに目をやった。

「メル・ムー。その愚かな子どもの後見を引き受けたこと、撤回する気はないか」

カン・マの言葉にメルは、静かに答えた。

「撤回する気はございません」

「では、その愚かな子どもに代わり、罰を受けよ。その子どもは裁きの場にて騒ぎ立て、長の言葉に従わずに反抗をした」

「はい」

鞭。

「ぶたれるのなんか、慣れてる。あたしは黙らない！」

叫ぶと長は、冷たい目でイルを見た。

「愚か者。わたしの言ったことがわからぬか。打たれるは、おまえではない。おまえの後見であるメル・ムーだ」

愕然となった。

「どうして……どうしてメルが！ 騒いだのはあたしじゃない！」

イルが叫ぶと、メルが振り返った。

「静かにしなさい。裁きの場にて後見をするとは、こういう事。長は正しい。おまえは黙って見ていなさい」

厳しい声音に、イルは黙った。ラニが嘲るような笑い声を上げた。

「分別のない、愚かなラツタに味方などするから」

イルは唇を噛みしめた。怒りがぐらぐらと沸いた。

「手を出せ、メル・ムー。両手だ。長の言葉を三度無視し、騒いだその愚か者の代わりに、鞭を受けよ」

「はい」

「メル！　メルが打たれる事なんてない！」

悲鳴のように叫ぶイルに、メルは「黙っていなさい！」と叱りつけた。少し青ざめてはいたが、背をまっすぐに伸ばし、両手を前に差し出す。

「長！　ひどい！　打つならあたしを打つてよ！」

「ケナ・ムー。メルの手を打て。まずは三度。その愚か者が長の言葉を無視した回数分だ」

カン・マが言った。

「その後は、その子どもが騒ぐたびに回数を増やせ」

イルは、喉の奥で悲鳴を上げた。慌てて手で口を覆う。ケナ・ム

ーが鞭を振り上げ、ためらうようにそこで止まる。

「打ちなさい、ケナ・ムー。イルには、自分のした事の結果を見せねばならない」

メルは静かに言った。

「メル……」

「打ちなさい。これはこの場では正しいこと」

イルは真っ青になった。何かなんだかわからない。けれど、自分のした事でメルが打たれる羽目になった。それだけはわかった。

「ケナ……、ケナ！ メルを打たないで！」

ケナ・ムーに走り寄り、すがって叫ぶと、カン・マが誰かに合図した。駆け寄ってきた誰かが、イルをケナから引き離れた。

「離してよ！ ケナ！ やめてよ！ メルを……」

「ケナ。五度打て。その愚か者がさらに騒いだ回数分だ」
「はい」

青ざめた顔で、ケナがうなずく。鞭を振り上げ、メルの手を打った。びしり！ という音が響く。

「メル！ ケナ、やめて！ やめてよっ！」

叫ぶイルに、カン・マが言った。

「さらに騒いだ。六度打て」

イルが青ざめ、立ちすくむと、耳元でくくく、と笑い声が聞こえた。

「良い気味だ、薄汚いラツタが。おまえ、もつと騒げ。取り澄ました顔のあの娘が、打たれる回数を増やしてやれよ」

イルは、唇を噛みしめた。そうだ。自分が騒げば騒ぐほど、打つ回数を増やすと長は言っていた。

では、自分に今できる事は。

目が熱い。悔しい。泣きたい。叫びたい。でもできない。メルのために、叫ぶことは我慢せねば。

イルは拳を握ると、自分の手に噛み付いた。叫ばない。叫ぶものか。

これ以上、メルを打たせたりするものか。

びしり！

鞭がメルの手に、赤い筋を作る。ケナ・ムーは顔を歪め、泣きそうな顔でメルの手を打っていた。

びしり！

メルは背筋を伸ばしている。青ざめてはいるが、その背は揺るぎなく、伸ばした両手が下がる事もない。顔だけを見ていれば、罰を受けているのはメルではなく、ケナのようだ。

びしり！

水晶花のかけらが入った籠が、地面に転がっている。さっき、落

としてしまったのだ。中身がちらりと見えた。光を反射するきらめき。

ラニが、馬鹿にしたようにくすくすと笑った。その表情の醜さ。周りで眺めている村人たち。ラニにおもねるように笑っている者もいる。だが大半は、無表情に見ている。

びしり！

暗くなってきた広場。夕焼けの色がこの場を染めている。そんな中、岩のようにどっしりと立ち、全てを見ているカン・マ。

びしり！

最後の一回が終わった。ケナが鞭を降ろし、息をつく。メルは最後まで顔を伏せる事なく、手を下げる事もなく。背筋を伸ばして立っていた。

その姿が、泣きたいくらい美しいと思った。

イルは、拳を口から離れた。体が震えていた。力が抜けて、足がぐにやぐにやした。今にも座り込みそうだ。手には齒形がついて、血が滲んでいた。

「六度、打ち終わりました」

ケナ・ムーが青ざめた顔で、長に向き直って言うのが聞こえる。

「手当てしてやれ」

カン・マが言うと、誰かが桶に入れた水と布を持ってきた。それをケナ・ムーが手ずから受け取り、メルの手を冷やす。

メルの両手は赤い筋が走り、腫れあがっていた。

イルを抑えていた腕が、いつの間にか離れていた。イルはおずおずとメルに近づいた。

「ごめ……、ごめんなさ、メル姉⁴」

小さく言うと、メルがこちらを見た。怒っているかと思って目を伏せた。すると声が聞こえた。

「言ったでしょう、イル、チャミ。妹分の為に力を尽くすのが、姉の仕事」

いつも通りの声だった。涙で周囲の光景が滲んだ。

「メル……」

「裁きの中では長に従いなさい。どれほどつらくても、理不尽だと思っても。それが、法。村で生きるための決まり事。イル。わたしたちの長は公平な方よ。決まりを守り、手順をきちんと踏む態度を示せば、低い身分の者であっても、公平に話を聞いて下さる」

その言葉には反論したかった。メルを打てと命じた、あんな長になぜ従わねばならないのか。その表情を見て、メルには何を考えているのかわかったらしい。きっぱりとした口調で言った。

「長は信頼に足る方。あの方は決して、身内だからと言って臍⁴はなさない。誰に対しても、見るべきは見、罰すべきは罰する。長の言葉をしっかりと聞いて従いなさい。良いね？」

イルは、黙ってうなずいた。

「後で、軟膏を持ってくる」

二人の様子を見ていたケナが静かに言った。一瞬、苛立たしげにイルを見たが、すぐに顔を背けて、イルに向かって濡れた布を突き出した。

「メルの手を冷やしてやってくれ。自分じゃやりにくいだろう」
「わかった」

言いたい事はいろいろあったが、イルはそう言った。布をケナから受け取り、メルの手を覆う。それを確認するとケナは、切なげな、悲しげな目でメルを見やり、長の横に戻って行った。

「では続けよう」

メルが打たれた事など何でもないかのように、カン・マが言った。

「ソル・コの娘ラニ。おまえはその幼子が、自分のものを盗んだと申し立てた。盗まれたものとは何だ」

ラニはいやらしい顔をして笑っていたが、その表情を引き締めた。

「水晶花のかけらにございます。あれはわたくしのもの。ラッタが手にするなど、分不相応なものにございます。長。そのラッタがわたくしの見つけた水晶花のかけらを盗みました。早くわたくしに返すよう、言ってやって下さいませ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6629n/>

最後の竜騎士

2011年5月17日05時46分発行